

伝説の隙間

有名な話には巷間伝説の過程で誤解や単純化がともなうことがある。調査の専門家なら誰でも知っている、調査史上もっとも有名な話——「1936年の米大統領選・予測調査における成功と失敗」にもそんな側面がある。

1936年の米大統領選挙は事実上、ルーズベルトとランドンの一騎打ちだった。選挙予測で定評のあったリテラリー・ダイジェスト誌は潜在読者名簿を貯め込んで、一千万人以上の高所得層を中心に郵送調査を実施して、237万6,523人から返送された回答を集計。ランドンの支持率54%で勝利を予測した。一方、ギャラップは有権者をよく代表するように属性分布を考慮して割り当てた3,000人の標本調査を実施。ルーズベルトの支持率54%で勝利を予測した。結果はルーズベルトが得票率60.8%で勝った。

この歴史的教訓は「200万人もの偏った大量観察よりも、たった3,000人でも母集団を代表する標本調査の方が優れている」ことを実証したことであった。

表 The Literary Digest 誌が各号で掲載した集計結果

	1936	Landon	Roosevelt	Lemke	Others	Total
1	9/5 %	16,056 65.0	7,645 31.0	754 3.1	234 0.9	24,689
2	9/12 %	61,190 61.4	33,423 33.5	4,169 4.2	952 1.0	99,734
3	9/19 %	153,360 60.2	88,815 34.9	10,374 4.1	2,169 0.9	254,718
4	9/26 %	293,972 58.4	185,495 36.8	19,632 3.9	4,410 0.9	503,509
5	10/3 %	438,601 58.0	282,524 37.3	29,083 3.8	6,599 0.9	756,807
6	10/10 %	713,451 56.9	485,392 38.7	44,825 3.6	11,048 0.9	1,254,716
7	10/17 %	1,004,036 55.4	728,088 40.2	61,981 3.4	17,384 1.0	1,811,489
8	10/24 %	1,182,307 54.8	878,526 40.7	75,119 3.5	22,787 1.1	2,158,739
9	10/31 %	1,293,669 54.4	972,897 40.9	83,610 3.5	26,347 1.1	2,376,523
結果	11/5 %	16,684,231 36.5	27,757,333 60.8	892,267 2.0	320,932 0.7	45,654,763

これは当時の朝日新聞でも報道され、5年後にギャラップの“The pulse of democracy”が大江專一訳で『米国の輿論診断』（高山書店、1941年）と題して出版されたが、広く一般化したのは戦後で、吉田洋一・西平重喜の『世論調査』（岩波新書、1956年）の影響が大きい。

今も多くの文献にギャラップ伝説が紹介されているが、実際に調べてみるといくつも誤解がある。瑣末なことでは調査の数値や投票数の細部が曖昧なことだが、勝者が変わる程の問題ではない。

意外なことは、ギャラップは単にダイジェスト誌と並行して予測調査を実施して結果的に当たった、というだけではないということである。開票は11月5日。ダイジェスト誌が予測報道を始めたのが9月5日なのだが、なんとギャラップはそれ以前に「もし今、ダイジェスト誌が世論調査を実施したらルーズベルト44%、ランドン56%くらい」で失敗するだろうとリリースを出して公言したのである。この記事は7月19日のthe New York Times

に掲載されている。ギャラップは当時の権威にセンセーショナルに挑戦し、予言を実現しただけでなく、自身の調査手法で大統領的中させるという衝撃的な演出をしたのであった。ダイジェスト誌は廃刊となった。

もうひとつ教訓がある。当時のダイジェスト誌を図書館で調べてみると分かる。表と図にまとめたが、ダイジェスト誌は返送された分から累積集計しながら9回にわたって調査結果を掲載したのである。図で明白なようにルーズベルトの上昇、ランドンの下降トレンドが観察できる。偏った標本といえどもトレンドには有益な情報があるようだ。

現在はインターネット調査が流行している。200万人近いネットモニターも存在し多数のネット調査が実施されている。この現象を晩年の林知己夫氏は「昔に退化している」と述べた。諸賢はどう思うだろうか。調査は実態ではないが、何かの指標ではある。

図 ルーズベルトとランドンの支持率推移

